

## 移住者の声・市民の声

### 人がつながる豊かな農村を目指して / 須坂市井上町にお住まいの竹前啓子さん

今回のインタビューは、須坂市井上町にお住まいの竹前啓子さんです。井上町は、上信越自動車道須坂長野東インターチェンジの近くにあり水田、果樹畑が広がり農村風景の残る地域です。農村の暮らしを中心に話しをお聞きしました。



【水田、果樹畑が広がり農村風景の残る井上町の雪景色】



## 【雪化粧した里山風景】

### ●井上町に嫁ぎ果樹農家として

「山間の中条村（現長野市）で育ち、39年前に兼業農家の主人と結婚し須坂市井上町の住民になりました。現在は種なし巨峰、シャインマスカット、クイニーナ、黄甘などを育てるぶどう農家です。

農業をしていた主人の父が体調を崩し、主人は勤めていたので、私が勤めをやめ農業を手伝うようになりました。最初は農作業をこなすだけで、楽しみも充実感もない日々でした。全てを仕切らなければいけない時が来て、初めて農業と向き合い、厳しさと深さに泣き、年月を経る事で手をかければかけるほど良いぶどうができる楽しさ、喜びがやがていになりました。太陽の下、夫婦で農業ができる事と『竹前さんのぶどうはおいしいね』というリピーターの声に感謝する日々です」



## 【竹前啓子さん】

### ●農村の交流

「子育て中はお母さん達の繋がりはありましたが、子育てが終わる頃から、お母さん達は、お互いに車ですれ違う時に顔を見て、挨拶程度で寂しくなりました。閉鎖感を感じていた農家のお母さん3人で仲間作りを呼びかけて太陽2(サンサン)サークルができ、現在19人で活動しています。

自分達が農村生活を楽しむため、大豆の種まきから味噌を作ったり、身近な花でフラワーアレンジメントをしています。また荒廃地を利用して井上保育園の子どもたちとサツマイモ、ジャガイモ、玉ねぎを植え収穫しています。土や虫や収穫物に目を輝かす子どもたちを見ると、私たちも本当に楽しい気持ちになります。

自然の恵みで農産物は育ち、多くの人たちが関わって食べ物になる事、命あるものをいただき私達は生きている事への感謝を持ち、いただきます、ごちそう様の言える子どもたちに育ってほしいと願っています」

#### ●次の世代へ残していきたいもの

「高度経済成長期前は、このあたりは地域の結びつきが強かったそうです。年寄りが子守をしながらお茶飲みをし、その中で子ども達は、生きるルールや知恵を身に着けました。水や燃料は貴重なもので、近所でお風呂を沸かし合い、お邪魔したり、招いたりし世代間、家族間の交流をしていました。現在は、勤める人が多くなり、プライバシーと個々の家庭中心の生活形態で地域の繋がりが少なくなりました。

井上町には、豊かな里山に囲まれた自然と、果樹を中心とした作物の収穫を願い感謝する文化などが今も受け継がれています。そのような資源を誇りに、生かしながら世代間、家族間の交流を行い、住んでいる人が楽しく暮らせれば良いなと思います」

人との繋がりを失ってしまう地域。職場や学校から家に帰るだけのものだとしたら、寂しいものです。地域とは、自分がそこで生きていく場であったほうが、きっと楽しいはずと、竹前さんのお話しをお聞きして感じました。

竹前さん、インタビューご協力くださりありがとうございました。

## 風土と調和した癒しの場所 / ハレプルメリア (HALEPLUMERIA) のオーナーの中島彰子さん

---

須坂市豊洲地区の果樹畑の一角にハレプルメリア (HALEPLUMERIA) という古民家を改修したヒーリングサロンのお店があります。古民家から見渡す景色、空間の居心地はとても良いです。オーナーの中島彰子さんに須坂にお店を開かれたきっかけやお仕事についてお聞きしました。



ハレプルメリア (HALEPLUMERIA) のオーナーの中島彰子さん

●須坂でお店を開かれたきっかけ

「元々、東京でアロマセラピーのお店に勤めていました。その後、長野市でお店を開き、14年間営業し、須坂にある実家の一角にある古民家を改装し、新たにお店をオープンしました。

若い頃、都会に住んだり海外旅行にいたりして、外の世界が良く映りましたが、須坂に戻ってくると、自然や人、歴史や文化の素晴らしさに気づき、須坂に生まれ育ったことを誇りに思いました。家族の協力も得て2014年にヒーリングサロン、ハレプルメリア (HALE PLUMERIA) をオープンしました。

現在は、スキルアップのためアロマエステを休み、ワークショップやカウンセリングのお仕事を中心に行っています。2018年から新たに展開する予定です」



## ●暮らしに癒しを取り入れること

「現代社会はストレスが多く、自分の身体や心の声を聞かずに、頑張り続けている方が多いです。

本当に自分が求めている生き方を選択できていない方が多いですね。

特に会社、組織の中に入ればストレスがたまってしまいます。男性の方などで多いのは、ストレスを忘れるためにお酒やテレビを見て休みの日を終わってしまう方が多いと思います。結局、ストレスを忘れられず溜めてしまう方が多いのです。

最近、海外では男性でもヨガやセラピーを取り入れる方が多いです。男性でも、思い切って体験することがとても大事だと思います」



古いものの良さを取り入れた室内はとても落ち着きます（和田）

## ●今あるものを大切に使い、楽しみをシェアする暮らし

「実はハレブルメリアのある建物は曾祖父が地元の方々に謡曲を広めるための練習場として建てたそうです。先祖代々、大切に受け継いできた土地と建物を生かし、ここを訪れて下さる方々に癒しを提供できる空間として再利用できたことは、私にとっても嬉しいですし、家族も喜んでくれました。

自分のルーツや先祖代々大切にしてきた土地、建物を大切に扱い、家族との関係を平和に築いていくことがとても大切だと感じています。休日は庭でりんごやハーブを育てています。家族と一緒に畑仕事をして、庭でピザを食べたりピクニックをして、仕事を楽しめるように工夫しています。今後は、庭や林檎畑も利用して、様々な方と田舎ならではの楽しみを共有できたらいいなあと考えています」



ベランダから見える自然豊かな眺望は眺めているだけでも癒されます（和田）

中島さんの自分の生活を大切にしながら送る生活は素敵だなと思いました。ハレプルメリア（HALEPLUMERIA）の空間はとても素敵な場所で、都心からのリピーターも多いそうです。ご興味のある方はぜひ行かれてみてはいかがでしょうか？

ハレプルメリア（HALEPLUMERIA）  
<http://www.plumeria-jp.com/>

## No40 楽しみながら営む地域の拠点カフェ / 「古民家カフェよだや」 をやられている依田菜穂子さん

---

今回のインタビューは須坂市北部の果樹地帯にある小島町の自宅の一角で「古民家カフェよだや」をやられている依田菜穂子さんです。「古民家カフェよだや」ではコーヒーやラテなどの飲み物やパイやケーキなどのお菓子を提供しています。カフェは農業の閑散期である1月～3月の土、日曜日のみ営業しています。お店を開いたきっかけなどをお聞きしました。

### ●結婚を期に須坂へ

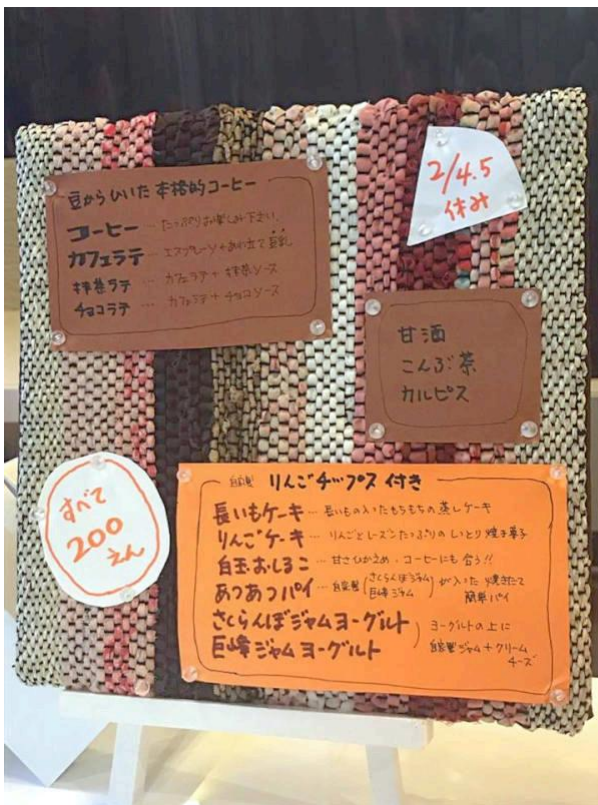
「私は元々東京出身で結婚を機に36年前に須坂に嫁ぎました。主人と共に専業農家として完熟のさくらんぼ、梨、巨峰、ふじなどを育てて直接販売しています。食べられるのに、傷があったりして出荷できないものをグラッセやジャムに加工してカフェで提供しています」



【「古民家カフェよだや」をやられている依田菜穂子さん】

●「古民家カフェよだや」を開いたきっかけ

「リタイア後のライフワークとして地域のお年寄りの方を中心に交流しながら、楽しい場を作りたいと思いました。主人の実家は果樹農家を行う前は養蚕（カイコを飼って繭をとること）をやっており、蚕を飼っていた築100年以上の古い蔵を改修し『古民家カフェよだや』を2014年にオープンしました。果物を大切に生産しているので、1つも無駄にしたいくはありません。ですから果物をジャムなどに加工してりんごケーキや熱々のパイなどを提供しています」



【メニューは全て200円。とってもお得】

## ●近所のお年寄りが集まれる憩いの場

「お年寄りの方は冬場寒いので、なかなか集まって話す場がありません。お年寄りの方が気軽に集まっていだけるよう建物も段差を少なくし、飲み物とお菓子をすべて200円で提供しています。飲み物とお菓子を頼んでも400円です。あまり利益になりませんが、来てくださり『楽しかった』と言って、次に来る時にお友達を連れて来てくださると嬉しいです。杖をついてわざわざ来ていただいたり、オープンしている3か月の間に4回も5回も来てくださる方もいます。

私も人とお話することが好きなので、良い出会いがあり充実しています。来てくださる方の憩いの場でありたいと思っています」



【なんとこれで400円。ながいもケーキとコーヒー】

近所の憩いの場を作る依田さん。『自分が楽しい生活を送るのには、周りの方にも楽しいと思ってもらえた方が、もっと楽しいじゃない』と話してくれました。

依田さんのような人との繋がりを大切にしながら良い場所を作る方が増えてもらえば良いなと思いました。

依田さん、インタビューご協力いただきありがとうございました。

古民家カフェ よだや  
長野県須坂市小島町884  
tel:080-2560-2562

## 伝統を受け継ぐ餅屋 / コモリ餅店、4代目の島田昌明さん

～伝統を受け継ぐ餅屋～

今回のインタビューはコモリ餅店、4代目の島田昌明さんです。コモリ餅店は地元産のお米を使い、お団子やお餅などを大正8年から変わらない製法で作り、地域に愛されているお菓子屋です。こだわりをお聞きしました。





【コモリ餅店、4代目の島田昌明さん】

● 伝統のおいしさ

「昔ながらの変わらない原料や製法です。挽きたて、作りたてをモットーにその日限りの命で日持ちしない新鮮さが売りの製品を目指しています」



● ぜひ食べてほしい朝生菓子（あさなまがし）

「信州産のうるち米を毎日午前2時に起きて石臼で挽き、上新粉を作り、お餅を作っています。餅などのでんぷん質のものは、時間を置くと硬くなります。やはり本来のおいしさを味わっていただくためには、その日のうちに食べていただくのが一番です。

1年を通して販売される『大福』や『だんご』のほか、季節ごとの行事に用いられる『柏餅』『桜餅』などがあります

お客さんには昔から続いている、その時でしか味わえない新鮮な朝生菓子の魅力を味わってもらいたいです」



#### ●幅を広げるお菓子

「須坂には果物や野菜などお菓子づくりに生かせそうな素材がたくさんあります。今後は農家の方と連携をしながら新商品を開発していきたいと考えています。

また、お客さんに製法や原料のこだわりを伝え、和菓子の背景にある美味しさを伝えていければ良いと思います」

昔ながらの製法や伝統を大切にするコモリ餅店さん。代々、受け継がれ、これからも地域から愛される味を大切にしてほしいと思いました。

インタビューご協力いただきありがとうございました。



地域おこし協力隊の和田です。

2017年3月末で地域おこし協力隊の活動が満期終了になります。

2014年4月から須坂市信州須坂移住支援チームの地域おこし協力隊として様々な業務に携わらせていただき、貴重な経験をさせていただきました。神奈川出身で須坂の事を右も左もわからない私を迎えてくださった須坂のみなさまには感謝するばかりです。本当にありがとうございました。

◎以前作成した『須坂市移住応援book スザカでくらす』をホームページに掲載しましたのでご覧ください。

---

須坂市政策推進課信州須坂移住支援チームでは、月に2回、移住を考えている方に須坂の暮らしを感じていただくため、メールマガジン「信州須坂ふるさと応援団メルマガ『ふるさと宅配便』」を発行しています。その中で、毎回、2名のお店をやられている方、会社を運営されている方、ものづくりをされている方、須坂へ移住してきた方などにインタビューを行っています。今回は、平成26年5月から平成27年3月までに紹介した84名のインタビュー記事を1冊にまとめました。読んで、訪れたい人、住みたい人が増えるよう、様々な面白い物や事に焦点をあて取材をしました。その中には、昔から須坂に暮らしてきた人々が築いてきた伝統もあります。地域の多様な文化もあります。四季折々の豊かな自然もあります。もちろん、個性豊かな人々も紹介しています。そんな須坂の宝物を編集しまとめました。須坂の暮らしのガイドブックとしてご利用ください。

さいごに、インタビュー集の作成にあたり多大なるご協力をいただきました須坂市民の方々に心から感謝申し上げます。

## No41 「移住への不安は希望に変化」田中さつきさん / 須坂市で頑張る新規就農者を支える家族Vol.1

---

田中さつきさん ◆30代、夫と子ども2人（男児5歳、女児3歳）2015年1月に東京から移住

扇状地に開けた須坂市は、日当たりや水はけが良く、様々な農産物の栽培に適しており、巨峰やナガノパープルなど、全国でも生産量トップシェアを誇る果物が多く、高品質の農産物が生産されています。盛んな地域農業を継承していく次世代の育成も積極的に行われており、県内外から農業を志す若者らが地域のベテラン農家のもとで農業を実践しながら学ぶ「里親研修」の受け入れにも力を入れている地域です。

このコーナーでは、そんな新規就農者を支えるご家族の方から、「移住と就農」という人生の一大転機を家族として支えた心境や、須坂暮らしについて、お聴きしていきます。

今回は、2年間の新規就農里親研修を卒業したばかりの田中典雅さんの奥様で、5歳の男の子と3歳の女の子のお母さんでもある田中さつきさんにインタビューをしました。



### ●夫が農業を目指すまで

物流業界の会社で海外勤務だった夫との結婚を機に、海外で生活を始めました。独身時代に海外留学を経験し語学力を生かした仕事をしたいと考えていたので、海外での暮らしに抵抗はなく、仕事も暮らしも充実していました。その傍ら、夫婦の間で「子どもができれば教育は日本でしよう」という考えがあったので、第一子を授かったことをきっかけに、帰国することになりました。しかし帰国した後も夫の仕事は転勤が多く、また海外勤務の可能性もなくなるわけでもない状況の中、子どものためにどこかで定住したほうがいいのでは、と考えるようになりました。しかしながら夫の口から具体的に「転職」とか「就農」と聞くようになると、先の見えない方向転換に大きな不安を覚えました。自分たちにとって幸せな暮らしとは何かと真剣に考え熱心に調べている夫の姿を見たり、家族で新規就農者の話を聞きに行ったり、農家体験ワーキングホリデーなどに参加したりしているうちに、「子どものために移住、定住するなら農業」ということに対して前向きな気持ちになっていきました。



## ● どうして須坂を選んだのか

東京で開催された新規就農セミナーに参加した際にいただいたパンフレットの中で「JA 須高」が目にとまりました。「就農するなら果樹栽培をしたい」と言っていた夫に、須坂を含む須高エリアを勧めてみました。その後、地域で開催された就農セミナーに参加して須坂市を訪れてみたら、首都圏や県庁所在地の長野市からのアクセスがとてもよく、総合病院もある、高校も3校もある、市とJAが協力して就農をバックアップしてくれる、なんといっても景色がいい、それと、後に里親研修でお世話になることになる農家の方のお話しに夫婦共々感銘を受けました。



## ● 須坂で生活して良かったこと、苦労したこと、須坂市への提言

良いことと言えば、スーパーが多くて買い物に困らない、臥竜公園や須坂市動物園など子どもを連れていけるところや、1年を通して楽しめる場所が市内にも近郊地域にも多いことです。子育て支援についても、公民館や児童センターでは親子で楽しめる企画があったり、小さい子どもを無料で託児してくれる大人向けセミナーもあり安心して学ぶことができるのも有難いです。

気になるのは、子どもの医療費について、これまで住んだ都市ではだいたい中学生くらいまで無料でしたが、須坂市は有料で1回の受診につき500円の負担となっています。それも、一旦通常の金額で支払いをした後で、500円を超えた分について後から振り込みによる還付を受けます。子どもの医療費負担金額は軽減されているとはいえ、振り込みなどの事務作業があることを考えると、なんだか煩雑な仕組みのような気がしますね。子育て支援は経済面も含め手厚い支援があるといいなと思います。



#### ●移住希望者へメッセージ

まず、遊びにきて見ていただきたいな、と思います。

私も夫も、実際に足を運んで見た須坂の風景を気に入ったことが、移住を決めるのにあたり大きかったと思います。移住して2年以上たった今でも、自宅から見える北アルプスや北信五岳の山々に毎日癒されています。

#### ●インタビューを終えて

さつきさんのお話しはどの質問にも真っ先に「家族のために働く夫を支えること」や「子どものために良い環境を整えたい」というコメントがありました。自分よりも家族を想う控えめながらも芯の強い良妻賢母といった印象を受けていたインタビュー中、須坂の良さとして語られたことのひとつ「お隣の長野市にあるMウェーブで好きなアーティストのコンサートに行ったときにコンサート終了後の30分後には帰宅して夕飯を食べていたんです、これって都会では有りえない凄いことですよ。程よい田舎の須坂ならでは良さですよ！」と、弾けるような笑顔を見せてくれました。

須坂市地域おこし協力隊 田島和恵

## No42 峰の原高原ペンションオーナー 鶴殿賢三さん / 先輩移住者に聞く Vol.1 「須坂市峰の原高原のペンションオーナー」

---

1月から地域おこし協力隊として峰の原高原で活動している齋藤です。須坂市の先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。今回は須坂市峰の原高原地区のペンションのオーナーである鶴殿賢三さんに峰の原高原でペンションを経営することになったきっかけや峰の原高原のいいところ、苦労しているところなどたくさんのお話をお聞きしました。



#### ●ペンションオーナーになったきっかけ

1974年から1975年にかけての高度経済成長期、東京に人が集まり、地価が上がって、家を建てるのに年間所得の数倍の値段が掛かりました。さらに東京近郊などに工場から有害物質が放出され、環境汚染が深刻な問題となっていました。ちょうどそのころ、30代になり結婚し、マイホームを持つということになりました。しかし、都会では地価が高く、それができず限界を感じていました。そこで、自然環境が良く、地価も安い地方に憧れを抱くようになり、その頃、バケーションやバカンスという言葉が外国から入って来て、日本も外国と同じく、これから長期休暇をとったり完全週休二日になったりするなど休みが多くなると考えられるようになり、そして、団体旅行から家族旅行へ変わり、観光からスキー・テニスなどの体験型になり、当時、ヨーロッパで流行っていたペンションに将来性を見出して、たまたま長野県で整備した峰の原高原のペンションオーナーになることを決意しました。



#### ●須坂で生活して良かったこと、苦労したこと

峰の原高原の生活は良いことだらけです。その中でも、自然の中で子育てするにはとても良い環境です。例えば、昨今話題になっている待機児童の問題はここでは無縁です。都会とは真逆で、保育園の方が児童の入園を待っている状態です。さらには、ペンションオーナーという仕事はお客様を第一に考え、家族で経営するもので、仕事も家族と一緒にし、



お客様がいなければより家族と一緒にの時間が増えます。しかし、やはり峰の原高原は雪がたくさん降ります。1メートル以上降るので、年を取るにつれて雪かきをするのがつらくなりました。



#### ●須坂市への提案

市にはとてもたくさんお世話になりとてもよくしてもらっています。市長にもこれからもよろしくお願ひしますという気持ちが強いです。ただ、須坂青年の家をやめるとなるとスキー場に大きな影響があるので、スキー場の存続のために頑張ってもらいたいと思います。

#### ●移住希望者へ「足るを知る」

ペンション業は、自分が借金してこれからどうなるかわからない商売をはじめるとは、はるかにリスクは小さいと思います。また、自分より偉い人はいないので楽しく自由に仕事ができます。お金はあったほうがいいですが、贅沢しようと思わなければ夫婦2人で暮らして子育てをしていくことはできます。夏は陸上の合宿があり大変ですが一緒にいると楽しいことばかりです。この仕事は機械が壊れたからすぐに業者を呼んだりするのではなく、まず初めに自分で何とかするというをしなければなりません。したがって日曜大工が好きな人にはもってこいの仕事です。仕事があり、子育ても充実し、自然環境も良く、ご近所みんなが話を聞いてくれるところなど、いいところがいっぱいです。移住希望者のみなさんには楽しんでもらえるとうれしいです。

地域おこし協力隊 齊藤祐哉

## No43 峰の原高原ペンションリミニ 大平真則さん・仁美さん夫婦 / 先輩移住者に聞く Vol.2「須坂市峰の原高原のペンションオーナー」

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。今回は須坂市峰の原高原地区の「ペンションリミニ」のオーナーである大平真則さん・仁美さん夫婦にインタビューしました。

◆平成8年10月に大阪府寝屋川市から移住

#### ●ペンションオーナーになったきっかけは父の誘い

「ペンションオーナーになる前は大阪府寝屋川市に住んでいました。昔、私の父が峰の原高原のパウダースキーがお気に入りです。峰の原高原スキー場に滑りに来て、ペンションリミ

二の初代オーナーさんの時に泊まりに来たという楽しい思い出がありました。時間が経ち、このペンションが売りに出されるということを知り、父が飛びついて見に行こうという話になり、父と母と私の家族がペンションオーナーとしてまずはじめに住み始めました。父は、お気に入りのスキー場がありスキーやペンションの思い出がたくさんあるここ須坂市峰の原高原だから良かったのであって、他のところでは考えられなかったです。さらに、大阪に7人で暮らすより峰の原高原に来てのびのび暮らすほうが気に入ったということもあります。今では、たまに大阪に帰っても早く戻ってきたい場所になっています。」



●須坂で生活して良かったこと、苦労したこと

「やはり、この自然の中でのびのびと子育てできる環境があるということが一番です。私たちも5人の子どもたち(その中には生後6ヶ月の娘もいました)を連れて峰の原高原にやってきましたが、20年経ってその子が成人するまで元気に育てることができました。土・日曜日のお休みは家族でバーベキューをみんなでしたり、子どもと一緒に工作をしたり、枯葉を集めて焼き芋をしたり、屋根の雪を下ろすときにはがんばって！と応援してくれたり、いつも子どもと一緒に何かをすることができます」

「逆に、交通が不便なところなので、買い物するにも、病院に行くにも車で山を降りて市街地まで出ていかなければなりません。今では、車の運転が好きで慣れてしまったので、そこまで苦労することはありませんが、20年前は須坂市内もそこまで栄えていなかったのも、こんな不便なところに住んで大丈夫なのかと不安になったこともありました。また子ども達の送り迎えも大変でした」

「ペンションだけでは生活が成り立たなかったのも、平日は、夫婦2人で子どもを両親に

預けて一日中バイトをして生活費と子ども達の学費を稼いでいました。」



●地域おこし協力隊への提案

「峰の原高原地区は高齢化してきているので支えてほしいです。たとえば、市街地に降りるときは一声かけて一緒に送ってもらうとか、人数の少ない村なので、地区の皆さんがおしゃべりする機会と場所を作って、みんなの交流の場をもっと増やしてほしいです。」



●移住希望者へ「四季を感じて楽しんでほしい」

「自然ですかね。冬がこんなに大変だったから春がこんなに楽しい、春がこんなに楽しかったから夏もこんなに楽しいのだろうなというように季節感を楽しんで味わってほしいと思います。大阪にいたときより四季を大切に感じ、何月になったらこういう風になるだろうなどと楽しめるようになりました。私自身はこれまで子育てで大変でしたが、子どもが大学を卒業した後、これから自分の時間を楽しむことを考えていけないかかなと思い

ます。もちろんお客さんは大切ですが空いた時間も多いので、せっかく長野に来たのだから主人とバイクでツーリングなどを楽しみたいなと考えています。」

須坂市地域おこし協力隊 斉藤祐哉

## No44 「須坂は子どもの成長にとてもよい環境」 Aさん / 須坂市で頑張る新規就農者を支える家族Vol.2

---

Aさん◆30代、夫（就農3年目ぶどう生産者）と子ども3人（10歳、7歳、4歳）2013年1月に神奈川県から移住



### ●夫が農業を目指すまで

須坂市に移住をしてきたのは2013年の春、長男の小学校入学のタイミングでした。私が夫から就農・移住の具体的な可能性を聞いたのがこの数か月前、お正月を迎える頃だったと思います。

夫は神奈川で酒店の店長として働いていたのですが、「自分でモノをつくりたい」という想いを抱き、長いこと、どこで何をつくるか、そのための足掛かりをどうするかなど、様々な面で徹底的に調べていたようです。

“長野県で就農をする”という方向性に辿りついたタイミングが、長男の小学校入学を控えた冬だったわけです。その時は突然のことだったのでとても驚きました。

### ●須坂を選ぶまで

私は夫から移住や転職（就農）について相談などを受けたことはないのですが、信頼する夫の選択に反対する理由など一切ありません。

夫が真剣に調べ検討し一歩一歩進んでいく姿を傍らで見守っていました。

## ●須坂で生活して良かったこと、苦労したこと

良かったこととしてまず挙げたいのは、須坂は子どもの成長にとってもよい環境であるということです。

たとえば子どもたちの小学校では、地域の方を先生に迎えて授業をしたり、保護者も一緒に参加する伝統的なイベントなどがあつたりします。

学校任せだけではなく、地域の大人たちがみんな子どもを育てるといような温かい雰囲気があります。

また、小学校への通学路は畑に囲まれた道なので、季節ごとの畑の様子や植物の成長などを自然に見て、吸収し、豊かな感性が育まれるのではでしょうか。

子どもが小学校の近所にあるぶどうの共撰所を見学した時、「お父さんの名前の入ったぶどうがあつた！」と嬉しそうに言っていました。

都会に住んでいたら共撰所を見学したり、さらにそこで自分の父親の名前を見つけるという経験などなかなかできることではないでしょう。とても感動したようですよ。

苦労したことといえば、移住当初、私は車の運転ができなかつたので移動の都度夫に車で送り迎えをしてもらわなければならなかつたことでしょうか。

市内にはコンビニやスーパーなどの小売店はたくさんあるので、ちょっとした買い物には自宅から徒歩で行けるところで済ますことが出来るのですが、やはり、ここでの暮らしには車は必需品ですし、運転のスキルも必要ですね。



## ●移住希望者へメッセージ

自然を身近に感じながら暮らせることが須坂市のいいところです。

特に、子どもが自然を見たり触れたりしながら成長できる環境は素晴らしいし、そんな子どもたちの様子を見るのは親としても嬉しいですよ。

## ●インタビューを終えて

今回お話しを伺ったAさんは、もともと子どもに英語を教える仕事をされていました。現在は家庭を守る主婦として、地区の活動や子どもたちの送り迎え、学校・保育園の行事への参加などに加え、ご主人と共にぶどうを育てています。インタビューで質問をするたびに、“須坂への移住は子どものためにもとても良かった”という答えが返ってくるのが印象的な、優しいお母さんでした。また、Aさんがそんなふうに見えるのも、移住・就農について多角的に調べ熟考を重ねられたご主人の決断があったからこそでしょう。強い信頼で結ばれたご夫婦の絆も垣間見えたインタビューでした。

地域おこし協力隊 田島和恵

## No45 峰の原高原ペンションホワイトイーグル 岡本鉄太郎さん / 先輩移住者に聞くVol.3「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

---

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦勞しているところを聞いていくコーナーです。今回は須坂市峰の原高原地区のペンションホワイトイーグルのオーナーである岡本鉄太郎さんにインタビューしました。

◆夫婦2人と息子さん、昭和57年12月(昭和59年～ペンションオーナー)に東京都国立市から移住

### ●ペンションオーナーになったきっかけ

以前勤めていた東京の会社の上司がペンションに憧れて経営してみたいということで、私もスタッフとして来ないかと誘われました。もともと学生の頃からスキーをするために信州に来ていたので気に入っていました。長男にもかかわらず実家を離れ信州に行ってみようと思ったのがきっかけです。

昭和57年、はじめはスタッフとしてペンションで働いていました。一緒に働いていた上司とオーナーの意見が合わなく関係が悪化してしまい、上司が出て行ってしまいました。しかし、自分はもうちょっとここで働きたいと思い峰の原に残ることを決めました。

その後、オーナーがペンション以外に行っていた仕事の手一杯になってしまい、ペンションを経営するのが難しくなりました。そこで、自分がこのペンションを購入して昭和59年にオーナーになりました。

ペンションのオーナーになりたくて峰の原高原にやってきたわけではなく、峰の原高原に住むようになってからここでペンションのオーナーになりたいと思ったのです。



●須坂・峰の原高原で生活して良かったこと、苦労したこと

若い頃はスキー、テニス、パラグライダーといった高原スポーツを満喫しました。今は年をとり運動するには体がきつくなってはきましたが、夏の涼しさや、水のおいしさ、空気のおいしさ、景観のよさなど、若い頃には気づかなかった峰の原高原の良さを発見するようになりました。

ほかの地域に比べ、冬は寒いですが夏が涼しいというのが一番ですね。子育ても保育園から中学校まで近くの菅平に通うことができます。住めば都というのではないかもしれませんが、峰の原高原は住んでみて初めてわかる良さというものがたくさんあります。四季により変わる風景や都会では味わうことができない空気や水のおいしさなどは住んでみて初めて感じることができます。

このペンションは借金ではじめたものですから、売り上げなどの営業面が逆に苦労しました。ペンション経営はお客が来ないと収入がまったくない商売です。給料やボーナスなどの安定したお金が入ってくるわけではないので、今年はだめだったということがあるわけです。その中で子どもを大学にまで進学させるというのは苦労しました。



●須坂市・地域おこし協力隊への提案

市の職員が峰の原高原に来ないで地域おこし協力隊にお任せというのではなく、実際に峰の原高原に来て知ってもらいたいです。また、協力隊も積極的に地域に溶け込むように努力してもらいたいです。たとえば、冬の雪かきなんかでも積極的に「雪かき手伝いますよ」と声をかけてもらいたいです。

峰の原高原地区の誕生から40年以上が経ち80歳以上のオーナーさんが増えてきました。体調や力仕事の面で放っておけない部分がどうしても出てくるので、その点をもっと考えてもらいたいです。



●ペンションオーナーを希望する方へ

大自然の中に住んでいるので、自然が大好きという人には良い仕事です。冬はスキー場があ



り、スキー場のお客がペンションに泊まってくださることで何とか生計を立てることはできます。

夏はテニスに登山といった高原スポーツや陸上合宿のような高地トレーニング、山菜取り、きのこ狩りなど選択肢がたくさんあります。たくさんある引き出しの中から自分はこれが得意だというものをもち、それで勝負していくのだという思いが大事かもしれません。たとえば冬はスキー客、夏は陸上合宿に専念し残りはその季節にあったものを提供するというようなことが大切です。

最後に、一人でペンションを経営するのは大変です。夫婦で経営したほうが楽にできると思います。

須坂市地域おこし協力隊 斉藤祐哉

## No46 「移住して良かった、と実感する日々」和田由記子さん / 須坂市で頑張る新規就農者を支える家族Vol.3

和田由記子さん◆30代、夫と子ども2人（4歳女兒、2歳男児）  
2016年2月に神奈川県小田原市から移住

今回は、神奈川県小田原市から須坂市に移住し2年目を迎えた和田由記子さんにお話を伺いました。

由記子さんは陶芸家、ご主人はインテリアデザイナーから転身し、現在はぶどう農家の元で里親研修を受けながら実践的に農業を学んでいます。



### ●夫が農業を目指すまで

夫が農業への転身を考え始めたのは、子どもが生まれ家族の将来を考えるようになったのがきっかけでした。子どもを授かった時の夫の年齢では、定年を迎えたあとも子育てが終わらないため、定年がなく健康な限り長く現役を続けられる仕事をということで農業を始めようと考えたようです。

夫婦ともに子どもを自然環境の豊かなところで育てたいという思いもあったので、移住に関しては賛成でした。しかし、農業への転身という考えを聞いたときは、私自身、農業に

ついて全く知識がなかったのが不安を覚えました。しかしその後、就農セミナーや農業体験会への参加などを通して知識を得てからは心配がなくなりました。

#### ●須坂を選ぶまで

農業といっても作物はさまざまですが、情報収集を進めながら最終的にぶどう栽培にしようということになりました。須坂市に決めたのは、気候や土壌など美味しくて高品質なぶどうを作れる恵まれた環境が揃っている地域であることと、里親研修の事前体験で受け入れてくださった方が「条件の良いぶどう畑を貸してくださる方が現れたので、もし移住してくるなら確保しておく」と連絡をもらったことが決め手になりました。まだ移住を決める前から、こんなに親身になって考えてくださる方に出会えたことは大変有難いと思いました。

#### ●須坂で生活して良かったこと、苦労したこと、移住希望者へメッセージ

子どもが2人とも保育園に通っているのですが、都会の保育園に比べて建物も庭も広くてきれいです。広い庭を走り回ったり、お散歩もしっかり時間をとってくれているようで、子どもの体力が向上していると実感しています。以前は外出先でちょっと歩くとすぐ疲れて抱っこをせがまれたのですが、今ではいつまでも元気に歩くようになりました。

他には、空気がきれい、山がきれい、野菜も新鮮、物価も高くない、買い物についてもスーパーなどいくつもあるし、そもそも今はネットショッピングで何でも取り寄せできるので困ることはありません。移住して良かったな、と日々実感しています。

最後に、陶芸家としての由記子さんをご紹介します。もともと、グラフィックデザイナーとしてご活躍されていましたが、自分で全てを手掛けて作品を作り上げたいという思いから作陶の道へ進むことを決意し、栃木県の窯業支援センターで本格的に2年間学ばれました。由記子さんの特徴的な作風として、スポイトから泥を絞り出して絵を描く「イッチン」という技法が用いられているのですが、一般的なイッチンに比べ大変細かく繊細な模様を描くために、注射針くらい口の細いスポイトを使用して描くこともあるそうです。極細のスポイトでの作業は泥が詰まりやすかったり、せっかく描いた模様が取れてしまったりすることもあるそうです。「簡単な作業ではないものの、思った通りの作品を作り上げるのが楽しくて続けている」と笑顔で語っていました。

「農家の夫を支える妻」というと、農業の手伝いをするものだと思われがちですが、夫婦のことはそのふたりの価値観で決めればよいことだと思います。我が家ではそれぞれ別の仕事を持っていますが、お互いの仕事を尊重し支え合っています」とパートナーとの関係や家族の在り方を語る由記子さんのことばに、伝統工芸の技法を用いながらも独自のスタイルを築く彼女の陶芸に通じるものを感じ、同時に、そのしなやかなお人柄に触れた気がしました。



※直近では8月に東京・原宿の『Style Hug Gallery』に出展、9月には京都で個展を開かれるそうです。ご興味のある方は是非訪れてみてください。

地域おこし協力隊 田島和恵

## No47 峰の原高原あすなろペンションポケット湯沢純生さん / 先輩移住者に聞くVol.4「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

---

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。今回は須坂市峰の原高原地区のあすなろペンションポケットの湯沢純生さんにインタビューしました。

◆夫婦2人、1976年12月に東京都から移住

●ペンションオーナーになったきっかけ

山が好きで学生時代は山登りが趣味だったこともあり、何か山にまつわる仕事がしたいと考えていました。脱サラし、当時あまり知られていなかったペンションに目をつけました。実際自分のペンションは全国で140番目くらいにできました。またペンション開発会社も一件しかなく、自分も23、4歳でペンションという言葉を知りました。最初は山小屋をしたかったのですが奥さんに反対されてしまい考えた結果、ペンションは山小屋とミニホテルと民宿を足して3で割ったものが良いなと思いました。何より簡単にはじめられたので「これならできる」と思ったのがきっかけです。



●なぜ峰の原高原なのか

最初は好きな白馬が良かったのですが、お金が倍以上かかるといわれ断念しました。次に山形県の蔵王でペンション村の開発がされていたのでそちらにしようと決めました。ところが、ペンションを建てる直前に地元の議会から開発について反対され、ペンションを建てることができなくなってしまいました。そして慌てて峰の原高原を知り、3回下見をしたところ、3回とも北アルプスの絶景を見ることができました。こんな絶景が見られるならここにしようと決めたわけです。ちなみに今のペンションも北アルプスや根子岳が見られるように設計しました。

●須坂・峰の原高原で生活して良かったこと、苦労したこと

住み始めて40年が経ちいろいろなことがありました。苦労したのは経済面で、すべて借金でペンションを建てたので返済していくのが大変でした。また、最初のうちは地元の人との付き合いも大変でした。商店の人にも冷たくされたり、子どもたちの学校生活も大変だったようです。

逆に、良かった点は、峰の原高原に住んで、2人の子どもを自然の中で育て上げられたことです。高校時代は菅平から上田までバス通学をしていたので、最終バスに乗るには(その時代最終バスは19時半)最後まで部活に参加することができなかつたり、途中で寄り道もできなかつたり大変な思いをさせてしまいました。そんな思いをさせたにもかかわらず、今でも家に帰ってきてはここがいいと言ってくれます。それが良かった点です。峰の原高原に来てはじめてテニスが上手になったことも良かったと思います。



●須坂市・地域おこし協力隊への提案

高齢化しているなので、昔と同じクオリティを保つことができません。なので、地域の若返りのために何かしないといけなかなと感じています。今の時代、ペンション経営は難しくなっています。この地域でできる事業の選択肢をもっと増やしてほしいです。

●移住を希望する方へ

標高1500mの場所で高地トレーニングをするような場所なので丈夫な人はもっと丈夫になります。それと小さい子どもがいるご家庭にはおすすめです。なぜなら、子育てについては都会的な教育環境に比べると天国のような場所だからです。ただし、子どもがある程度育ててしまい都会の便利さになれてしまった場合は、不便な場所ですので大変かもしれません。よってペンションを運営するならば小さいお子さんがいたり、これから子育てをしたい人には最高です。また、ドライブが好きな人は山を下りて市街地へ買い物に出かけるだけでも楽しめるのでおすすめです。

須坂市地域おこし協力隊 斉藤祐哉

## No48 「夢を追うのは楽しい」吉田美絵さん / 須坂市で頑張る新規就農者を支える家族Vol.4

---

「夢を追うのは楽しい」今回のインタビューで心に残ったことばです。さらりとそう語ってくれたのは、一見クールで都会的な印象ながら、話をしてみると、明るく茶目っ気ある語り口で自然体な雰囲気を感じさせる吉田美絵さんです。この春、2年間の農業研修を卒業したご主人とともに、農家としての一步を踏み出しました。



### ●夫が農業を目指すまで

夫はプログラマー、私は食品関係の会社でデンプンの研究・商品開発の仕事をしていました。特に不満とか不安とかがあったわけではないのですが、あるとき気づいたら、家に田舎暮らしについての本がどんどん増えてました（笑）。私たちの場合は、農業を目指すにあたり具体的なきっかけがあったわけではなく、田舎暮らしに憧れを抱き、どうしたら田舎で暮らせるかと考えていたら、農業に辿りついたという流れです。

“田舎暮らしの夢”を夫婦で語らう日々が3～4年くらいありましたので、夫が農業をやりたいのなら自分も一緒にやろうと、自然に思うようになっていました。

Iターン移住で新規就農というと、かなり思い切った決断だったのではないかととられがちですが、私たちは長い時間をかけて、田舎暮らしという自分たちの夢の実現に向かってきただけなのです。



### ●どうして須坂を選んだのか

『新農業人フェア』などのイベントに参加し、新規参入しやすい作物や場所を探していたとき、いくつかの土地・いくつかの作物で魅力を感じたものもありました。その中から須坂を選んだ理由は、「須崎市でのぶどう栽培」が、私たちにとって、生活・収入などのバランスがよい“生活ができる農業”のイメージに合ったものだと感じたからです。誇張もなくありのままを誠実に、そして具体的な話を聞かせてくださった須崎市のご担当の方には深く感謝しています。

### ●須坂で生活して良かったこと、苦労したこと

良かったことというと、とにかく果物と野菜が美味しいことです。そして、自分の体で食べ物の旬を感じることができるようになったのが嬉しいです。例えば夏が旬のキュウリの美味しさを知り、わざわざ旬でない時期にキュウリを使った料理をしようと思わなくなりました。他の食べ物も同様です。

それと、いつも山が目に入る風景がそこにあることが良いところですよ。須坂からは北信五岳や白馬など北アルプスの山々が良く見えるのですが、ふとしたとき、例えば1日の仕事終わりの帰り道に山がきれいに見えると、それだけで嬉しいというか、心が満ち足りていくような感じがします。

苦労したことは、日常生活に車が必需品なので、ペーパードライバーだった私は車の運転を数か月にわたって練習しました。また、徒歩や自転車で出かけることがなくなったので、運動量が激減してしまいました。少しでも運動不足を解消したいので、市で開催しているヨガ教室に通っています。

### ●移住希望者へメッセージ

いろいろな可能性があると思いますので、できるだけたくさん情報を集め、話を聞いたり見に行ったりすることをお勧めします。多くの可能性の中から、自分に合うもの・納得のいくものを選べば、その道へすすむことへの不安が減ると思います。

私たちにとってはそれが、「須坂でぶどう農家になること」でした。



### ●インタビューを終えて

ご主人がブドウ栽培について里親研修を受けておられた2年間、美絵さんはご主人の研修先である里親さんの元でパートとして働きながら農作業を学びました。ご主人の独立とともに美絵さんも現在はご夫婦二人三脚で自分たちのぶどう畑で作業をしています。

「夢を追うのは楽しいことだから」と、移住・新規就農の道にまっすぐに進まれた美絵さんに今後の目標をお聞きすると、「もっと畑を増やしたい」「ぶどうの品評会で賞を獲りたい」「ぶどう栽培は技術がいるものだから、高い技術を身に付けて高品質のぶどうを作りたい」と、微笑みながらも力強い口調でつぎつぎと語っていただきました。

夢や目標をしっかりと抱き、着実に前進する芯の強さがあるからこそ、彼女はいつも自然体でいられるのかもしれないな、と思いました。

## No49 峰の原高原 かすみ亭 横山三恵子さん / 先輩移住者に聞くVol.5 「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦勞しているところを聞いていくコーナーです。今回は須坂市峰の原高原地区のペンションのひとつ、かすみ亭のオーナーである横山三恵子さんにインタビューしました。

◆平成6年6月に埼玉県川越市から移住

### ●ペンションオーナーになったきっかけ

以前、主人が都内でホテルのコックとして働いていましたが、50歳の時に体調を崩してしまいました。それをきっかけにコックの経験を活かせるペンション業を始めようと考えました。妙高高原で開業していた友人のペンションを見に行き、ペンションならレストランもできると思い、不動産屋さんに峰の原高原のペンションを紹介してもらったのがきっかけです。



### ●峰の原高原で生活して良かったこと、苦勞したこと

峰の原高原は、夏は涼しく家の中では蚊にも刺されないのでもとても過ごしやすいです。地区の作業もペンションのオーナーさんたちが一つになって助け合って作業しています。道路もきれいにしており、ほかの地域のペンション村に比べてもしっかり整備されていると思います。ただ、冬は寒さが厳しいので防寒対策に苦勞しますね。お客さんは菅平高原が近いのでラグビー関係のお客さんもやってくるので立地条件は良いほうではないでしょうか。





●須坂市・地域おこし協力隊への提案「知ってもらう」

若い人が今のオーナーと代替わりできる仕組みを考えるなど、峰の原高原の活性化について真剣に考えてもらいたいです。ここは、須坂市内や長野市内へ働きに出ることもできます。そこをもっとPRすれば人は来ると思います。また、市内の人がペンションに泊まると補助を出すなど、もっと市民や若い人に峰の原高原のことを知ってもらいたいです。

●ペンションオーナーを希望する方へ

峰の原高原のペンションは、四季の素晴らしさと個々のオーナーを気に入って泊まりに来てくれるお客様がほとんどです。今の若者には受け入れにくいと思います。ゲストハウスや民泊という形態でもいいのではないのでしょうか。若い人の新しいアイデアがあれば、峰の原高原で住み続けることができると思います。



◆山崎広子さん

40代、2003年頃に長野市から移住、夫と子ども2人と孫

今回は、就農3年目の山崎広子さんにお話を伺いました。

就農にあたり、ご主人とともに研修を受け、現在は『山ちゃん農園』の共同経営者として奮闘していらっしゃいます。

彼女は須坂市で新規就農里親研修生を受けた女性の第一号として道を切り開いてくれました。



●夫婦で農業を目指すまで

私はもともと販売や接客など屋内での仕事に就いており、屋外での農作業は大変だろうと思っていました。

そんな私が農業の魅力に目覚めたきっかけは、ご近所の方の紹介で農園のお手伝いに行ったことでした。

土や直物に触れる農作業は思いのほか楽しく感じ、職業の選択肢のひとつとして初めて「農業」を意識しました。

しかし当時は今のように新規就農者を支える制度が整っておらず、先の見えない不安感もあり、就農への道に進むことはありませんでした。

私たち夫婦には同じ仕事を一緒にしたいという夢があったので、どんな業種・どんな仕事だったらその夢をかなえることができるのだろうかと日々考えていたときに、再び「農業」に辿りつきました。

そこで、以前お手伝いをした農家の方に連絡をとってみると、須坂市では新たに新規就農里親研修の制度を利用した研修生が誕生し、その指導にあたる“里親”となっていたのがまさにその農家さんだというではありませんか。

いろいろと相談に乗っていただいているうちに、「この人についていこう！」と決意し、夫婦ふたりで農業研修を受けることにしました。



### ●農業への道を目指して良かったこと、苦労したこと

今は笑って話せますが、研修中は、正直なところとてもつらかったです。

なにがつらかったかというと、私は女性なので男性に比べ力や体力で劣るのは当然かもしれませんが、仕事で「女だから無理、女だから出来ない」と言われたくなくて。

男性に負けたくないし、自分自身も女性であることに甘えなくなかったんです。

それと、私は須崎市での女性農業研修生第一号だったので、私が認められれば、きっと次の人（農業を目指す女性）にも繋がる、という思いもありました。

また、“女性だから”という以外に、里親さんのご指導がとても厳しかったです。

でも、「ムチ」だらけの厳しい指導の中、良く出来た仕事はきちんと評価し褒めてくださる。

そんなとっておきの「アメ」がなんとも嬉しくて心から励みになりました。

今となって思うことは、厳しく徹底的に仕込んでいただいたからこそ、就農1年目から大きな困難や壁にぶつかることなく、順調なスタートを切ることができました。

また、就農2年目には、東京卸売市場でセリにかける順番をきめる須高エリアの品評会で私たち夫婦が育てたナガノパープルが入賞することができました。

この品評会での入賞とは、東京卸売市場で須高エリアを代表するぶどうとして売り出すということで、大変名誉なことです。

このように、私たちが育てたぶどうや生産者としての私たち自身が周りに認めもらえることは、私たちが育てあげてくださった里親さんへの一番の恩返しだと思いながら、日々の仕事に邁進しております。

### ●ご主人の佐(さ)斗(と)志(し)さんから、就農を希望する女性へのエール！

「女性は根気強くて、手先が器用で、仕事が丁寧。だから農業は、女性に向いている仕事だと思います。

機械を使う仕事にしても、機械があるからこそ体力に関係なく作業をすすめられるのだし、車と同じで慣れれば使いこなせるようになるから大丈夫。

それと、家事や子育ては女性の仕事であるかのような風潮があるけれど、農作業も含め家事も子育ても夫婦や家族がそれぞれの得意分野やできることを分担すればいいだけのこと」広子さんが輝いている理由のひとつに、共に歩む佐斗志さんの存在が大きいのではないのでしょうか。



### ●インタビューを終えて

農業の道に進むことで「夫婦で一緒にできる仕事」の夢を叶えた広子さんご夫婦の次の夢は、作業をしながら販売ができる「直売所兼作業小屋」を建てることだそうです。かなり具体的で「夢」というよりは山ちゃん農園の事業計画。思い描いたとおりに、着実に歩みを進めていかれることでしょう。

※今年もやります！『山ちゃん農園』直売所のご案内

9月の土・日・祝日のみ、「北信州くだもの街道」沿いのぶどう畑の一角で直売を行います。

『南原町』信号から須坂長野東インター方面へ進み臥竜橋を渡ってから約500m先の左側、『高甫小入口』信号からは小布施方面へ向かい約400m先の右側です。

目印は①赤とピンクののぼり、②グリーンのテント。

開店時間は10時～16時、雨天の場合はお休みです。

太陽のように明るく周りを元気にしてくれる広子さんに会いにきてみませんか？

須坂市地域おこし協力隊 田島和恵

## No51 峰の原高原ペンション ロッジ アボリアの橋本 大さん / 先輩移住者に聞くVol.6「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

---

みなさんこんにちは。

このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどのようなものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。

今回は須坂市峰の原高原地区のペンションのひとつ、ロッジ アボリアの二代目オーナーの橋本 大さんにお話をお伺いしました。

◆平成27年7月に東京都から移住

### ●ペンションオーナーになったきっかけ

私は峰の原高原のペンションで生まれ育ちました。

峰の原高原は小さいころから好きで、いずれはペンションを継ごうと思っていました。

ところが、父が大きな病気を患ってしまい、そのときに住んでいた東京から戻ろうかなと

思い始めました。

27歳になり会社も4年間働いたし、次のステップでペンションを継ぐなり何か別の仕事をしようかなと思っていました。

3年間ペンションにかかわる仕事をしてから実家のペンションに戻ってこようと決めていました。

しかし、父の病気があんまり芳しくなく、体調が崩れていく中で3年も待てなくなっていました。

計画していた3年間をやめて、平成27年7月に会社を辞めて実家に戻り徐々に父から自分へとシフトチェンジしていきました。

そしてその年の暮れに父が亡くなり、自然に代替りして自分がオーナーになりました。



#### ●須坂・峰の原高原で生活して良かったこと、苦勞したこと

峰の原高原で生まれ育って思うことは環境がすごく良いということですね。

峰の原高原は認知度が低く、近くの長野市でも知らない人がいます。

ですが、手つかずの自然があり、隣の菅平高原とは違い大きいホテルなどもなく静かなところで、自然の中にいることを感じさせてくれます。

合宿の騒がしさが少なく、高原らしい高原を味わうことができます。

逆に、高原であるからこそ急いで病院に行くとなると同じ須坂市内でも20~30分かかります。

買い物もすぐそこまでということではないので、前もってこれくらい必要だなという量を買っておかないといけません。

それが夏ならまだ良いのですが、冬に雪道をとばして街へ行くわけにはいけません。

さらに、うちは薪ストーブを使うので、その薪を用意するのに一週間くらい重労働しなければなりません。

そういった面で特に冬に苦勞しているなと感じています。

### ●須坂市・地域おこし協力隊への提案

若い人をもっと呼んでください。

まず、齋藤隊員が一年活動してみて、ここのよさ・大変さを伝えていくべきですが、何よりもここの魅力をもっと伝えてほしいです。

正直言うと若い人はペンションを経営したいという人はいないと思います。

またここに住んで仕事に向かうという人も少ないと思います。

ですので、峰の原に住むメリットというものを見出してほしいです。

### ●移住を希望する方へ

良いなというところはたくさんあります。

もちろん、都会で仕事をするということは経験も積めますし悪いことはありません。

しかし、都会や街では経験することができないことが峰の原ではできます。

自然が好きだ、山が好きだという人に峰の原はおすすめです。

ペンションをしたい方は、収入という面では他の地域と比べて夏は陸上合宿などがありたくさん人が来るのでやりがいがあります。

冬は極寒ですが、夏は涼しくていいところです。



ロッジ アボリア

須坂市大字二礼3153-166

TEL0268-74-2704

<http://www.avoriaz.jp/>

## 仕事と住居をパッケージで提供します / ストレスフリーでスピード移住 「移住支援信州須坂モデル」

---

### 1. 移住相談～体験ツアー～仕事・住居までパッケージング

#### 「移住支援須坂モデル」とはストレスフリーでスピード移住につなげる仕組み

今年度からスタートした『移住支援信州須坂モデル』で初めての移住者が須坂市へやってきました。『移住支援信州須坂モデル』とは一言で言うと、移住希望者に対して移住相談、移住体験ツアー、仕事・住居紹介等をパッケージにして提供することで、移住希望者の不安を解消しストレスフリーでスピーディーに移住へとつなげる仕組みです。

#### ●『移住支援信州須坂モデル』第1号は大阪府茨木市から移住した今園知之さん41歳

⇒須坂市へスピード移住するまでの経緯

- ① 6月17日（土）大阪で開催の移住セミナーで面談 ⇒ 初めて須坂を知る
- ② 7月1日（金）移住体験ツアーを実施 ⇒ 中澤鋳造所(須坂市野辺町)を見学、アパート内覧
- ③ 7月13日（木）移住決定⇒ 今園さんより中澤社長へ就業の意思を伝える
- ④ 8月16日（水）須坂へ移住
- ⑤ 8月21日（月）中澤鋳造所で仕事スタート ⇒ 須坂で新たな第一歩を踏み出しました

☆大阪での相談会に参加してから仕事・住居が概ね決まるまでなんと2週間、移住を決断するまで1か月、移住するまで2か月とストレスフリーのスピード移住を実現しました。



○大阪での移住相談会で須坂を紹介（6月17日）



○移住体験ツアーで中澤社長と面談（7月1日）



○就業を開始しました（8月21日）

## 2 ストレスフリーでスピード移住につながった理由は「移住支援須坂モデル」

⇒移住相談と仕事と住居をセットで提供

(1) 首都圏等での移住相談会を定期開催

(2) 移住体験ツアーを随時開催

(3) 安心して選べる具体的な求人情報や住居・生活環境の情報を提供

●仕事を探す段階で諦めてしまう移住希望者

これまでの移住相談会では仕事に対して具体的な情報提供ができませんでした



た。また、地方への移住を希望する30代40代の方にとって仕事を探すことは大変な労力となり、そこで諦めてしまう移住希望者も相当数いると思われます。また、移住までに現在の仕事の整理や引っ越しの準備等で仕事が決まってから移住まで数か月を要する場合もあることからなかなか移住の前に仕事を決めることが難しい状況もあります。**それを解決する仕組みが『移住支援須坂モデル』**です。

### ①須坂市移住・定住アドバイザーが移住協力求人企業を開拓

地方で早く安心して仕事を見つける移住希望者のニーズを解消するため、**須坂市移住・定住アドバイザーがハローワーク須坂と連携**し求人が出ている企業を訪問。都会からの移住者を受けいれてもらえるのか、移住までの期間を考慮してもらえるのか、移住体験ツアーで事業所見学に協力してもらえるのか等々1軒1軒交渉し、現在、**移住協力求人企業は16軒**まで増えてきました。(29年1月1日)

☆須坂移住協力求人企業はこちらをご覧ください

### ②安心して求人企業をイメージしてもらう「須坂しごとラボ」

移住希望者はなかなか簡単に須坂まで来ることはできません。そこで須坂市移住・定住アドバイザーが移住協力求人企業を詳しく取材し「須坂しごとラボ」としてホームページ等で移住希望者へ情報提供。ハローワークの情報だけでは知ることができない事業所をきめ細かく紹介することで、**移住希望者にとって、よりリアルに安心して求人企業をイメージ**することができるようにしました。



☆須坂移住協力求人企業はこちらをご覧ください

### ●住居は空き家バンク、アパート、そして社宅情報も提供

住居に関しては須坂市空き家バンクだけでなく、市内のアパートの情報、また移住協力求人企業が持っている社宅の情報も提供。移住体験ツアーでは、ただ

の見学だけでなく、仕事も住居もより具体的にイメージしてもらうようにしています。

※今園さんの場合は、以前、地域おこし協力隊が住んでいたアパートの大家さんから情報提供。ツアーに合わせ物件内覧し、家賃、立地条件等その場で気に入りました。

☆須坂市空き家バンクはこちらをご覧ください

### ●移住者応援企業も開拓中

酒井商會…新車中古車購入者にスタッドレスタイヤサービス（交換1回無料）

### ●移住支援須坂モデルで東京から40代夫婦も移住します

- ① 5月27日（土）須坂市個別相談会（銀座NAGANO）で移住相談
- ② 6月 3日（土）移住体験ツアーを実施 ⇒ 博善社を見学・面談、社宅見学
- ③ 7月1日（土）博善社で面接試験・採用決定
- ④ 8月～9月 自動車を免許取得・仕事整理・引越準備
- ⑤ 10月1日 博善社で就業開始（9月下旬引越予定）

## No52 「モヤモヤ考えているより、来てしまえば何とかなる！」 / 須坂市で頑張る新規就農者を支える家族Vol.6

---

### ◆鈴木正子さん

40代、夫と2人の男の子、2014年3月に名古屋市から移住

「モヤモヤ考えているより、来てしまえば何とかなる！」

男前なこの一言、ふんわり優しい癒し系な面と、都会から田舎へのスピード移住を支えた肝っ玉奥さんな面を合わせ持つ鈴木正子さんから、移住希望者へのメッセージです。

移住には大きなエネルギーが必要と言われますが、ずっとやりたかったことに向かうとき、運氣やご縁といった、目には見えないなにかの“流れ”に委ねてみるとスツとうまく事が運ぶこともある。

そんなお話を伺いました。

### ●夫婦で移住、農業を目指すまで

移住前は、夫はサラリーマン、私はアロマトリートメントのサロンを経営し、名古屋で暮らしていました。

二人ともともと自然が好きで、いつかは自然豊かなところで暮らしたいという憧れを持っていました。

また、夫は趣味のバイクで農作業のバイトをしながら全国を旅行していたり、夫の母の実家は島根県でぶどうを生産している農家であったり、私自身は実家が兼業農家で田んぼの手伝いをするのが当然という環境で育ちましたので、夫婦二人とも農業に対して親しみがありました。

移住・就農へ向けて心が動きだしたのは子どもが生まれてから。

子育てをするなら自然豊かなところがいいと真剣に考えるようになりました。夫が仕事を

辞めて農業を目指すと言ったときは、私にはなんの根拠もなかったけれど「なんとかなる！」と背中を押しました。



#### ● どうして須坂を選んだのか

そこから早速移住地探しです。

そうはいつでも夫は全国を旅行して回っていた経験から「就農するなら長野県でぶどう」という長野県への愛着があったようで、長野県内に絞って地域で開催される就農相談会などに何度か足を運びました。

そこで「ぶどうなら長野県北部」というアドバイスを受け、須坂市農林課の職員の方から詳しいお話を伺うと、不思議なくらいにとんとん拍子に話がすすみ、農業里親研修を受ける農家さんや住居も見つかり、須坂市に移住しました。

夫が仕事を辞めてから移住まで、わずか3ヶ月ほどでのスピード移住でした。



#### ● 須坂で生活して良かったこと、苦労したこと、移住者希望者へメッセージ

須坂で残念だと思ったことはただひとつ、道が悪いと思いました。

狭かったり、舗装がガタガタしていたりで寝ている子供も起きてしまいます。でも、それ以外は住みやすく、いいことだらけです。自然が豊かな環境なのはもちろんのこと、自然や安全安心な食べ物へのこだわりなど共通の関心事を持つ友人に恵まれています。

ご近所の皆さんには子どもたちを可愛がっていただいたり、とても良くしていただいています。

移住というと知らない人ばかりで心配というイメージがあるかもしれませんが、地域の集まりなどに積極的に出て行くことで顔を覚えていただくと、皆さんが気にかけてくださって、応援して下さいます。

我が家は須坂に移住し農業を始めたことで、家族で過ごす時間が増えました。

農繁期などは多少睡眠時間が少ないこともありますが、なにより、自分たちが楽しんでやっていることなので、日々笑顔でいられますよ。

正子さんご主人の洋二さんの農園『Green Bell Farm』のこだわりは「子供が安心して食べられるものを作りたい」と想いから、土づくりに力を入れ、原料がはっきりしている有機肥料を使用するなど、安心して美味しい生食ぶどう・ワインぶどうを生産すること。

年々作付けの規模も増え『Green Bell Farm』のぶどうだけでつくられたワインが出来るのももうすぐ。

これからのご活躍に注目したい、須坂で頑張る新規就農者のご夫婦です。



『Green Bell Farm』（グリーン・ベル・ファーム）

〒382-0071 長野県須坂市小河原町699

Email. [greenbellfarm@bc4.so-net.ne.jp](mailto:greenbellfarm@bc4.so-net.ne.jp)

Tel.026-477-2541

須坂市地域おこし協力隊 田島和恵

みなさんこんにちは。

このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどのようなものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。

今回は須坂市峰の原高原地区のペンションのひとつ、木下ペンションのオーナー木下圭介さんにお話をお伺いしました。

◆昭和51年に名古屋市から移住



#### ●ペンションオーナーになったきっかけ

会社に勤めて課長や部長になっても大したものになるわけでもなく、重役になることはないと思い、このままサラリーマンで良いのかと考えるようになりました。

そんな時、旅行仲間がペンションを営業していると知り、ペンションとは何かと興味を持つようになりました。

その人にペンションの話を知ろうとしたところ、旅行好きなのだから実際見てみると言われ自分で調べることにしました。

斑尾高原、原村、峰の原高原を見て周りましたが、斑尾高原は雪が多く年をとってからの雪かきが大変で、原村はペンション村からスキー場までが遠くお客さんの送り迎えが大変だったので、残った峰の原高原に決めました。

「なるようになるさ」の感覚でオーナーになることを決めました。

#### ●須坂・峰の原高原で生活して良かったこと、苦労したこと

まず、車があれば交通の便がいいということです。

長野まで約30キロですので、ちょっとしたディナーが食べられ、ちょっと足を伸ばせば、二時間ちょっとで日本海の海の幸を食べられます。

また長野駅や上田駅まで一時間以内で行けるので東京に行くのも苦労しません。

斑尾高原などは長野市内に行くのも時間がかかりなかなか気軽にディナーや新幹線を使って東京に行くのが難しいと聞きました。

また、冬は長野・須坂方面や上田方面は除雪がしっかりされて、峰の原高原の中も除雪が行われます。

峰の原高原には細い道がないので、雪道の運転が初心者の人でも気軽に峰の原高原に来てペンションに泊まることができます。

また、峰の原高原に住んでいて苦労と感ずることはあんまりないですね。



#### ●須坂市・地域おこし協力隊への提案

須坂市街地などに住む人たちは、峰の原高原に移住してきた人を40年以上経った今でも山の人と感じている人がたくさんいます。

その意識改革を積極的にしてもらいたいですね。

そのためには須坂市自体が峰の原高原の生活についてもっと知ってもらいたいです。

峰の原高原のことを市民に広く知ってもらわなければ、都会の人に峰の原高原を紹介することはできないと思います。

#### ●移住を希望する方へ「いっぺん来てみてください」

峰の原高原はいいところです。ペンションを営業していなくても別荘として買ったところに住んでいる人もいます。

峰の原高原の自然、空気のおいしさと、ペンションオーナーの心の温かさが合わさった他のところにはない魅力があります。

やはり、それは一度峰の原高原に来てみないとわからないです。

来て、ペンションに泊まって、峰の原高原を知り、良かったと感じ、また来たくなる。

そして最終的にここに住みたくなる。それが一番なんじゃないかなと思います。



木下ペンション

須坂市峰の原高原3153-576

TEL0268-74-2310

須坂市地域おこし協力隊 斉藤祐哉

## No54 「まさか主人が本気で就農するとは」 / 須坂市で頑張る新規就農者を支える家族Vol.7

---

### ◆丸山里世子さん

本人、夫、長男、長女、2013年1月に静岡県沼津市から移住

今回お話しを伺ったのは、須坂市出身でご主人の就農とともにご実家にUターンされた丸山里世子さんです。

「まさか須坂に戻るとは、まさか主人が本気で就農するとは。安定していた仕事を辞めるなんて、考えてもいなかった。農業には今でも反対（笑）」

満面の笑みでインタビュー最初の一言が“反対”、あまりに爽やかに言い切るので聴き手の私まで思わず笑ってしまいました。

そんな和やかな雰囲気ですスタートしたインタビュー、大切な家族を気遣い心配だからこそ率直なお気持ちをお聞きしました。



### ●夫が農業を目指すまで

夫は製薬会社の営業、私は薬剤師として働いていました。

夫は結婚当初からずっと「いつか農業をやりたい」と言っていたけれど、それは憧れや、せめて定年退職してからのことを言っているのだと思っていました。

それがまさかこんなに早く現実に実行に移すことになるなんて、という気持ちです。

彼の考えとしては、モノをつくる仕事への憧れだけでなく、現実問題として定年以降の生活のための収入を考え長く続けられる仕事として農業を捉えていたようです。

実際に夫の仕事ぶりを見ていると、農業は覚えることも沢山ありますし体力も使うし、定年を待つよりこのタイミングで始めてよかったんだと思うようになりました。



### ● どうして須坂を選んだのか

須坂は私の実家があり、また、実家で畑を持ってはいるものの、母ひとりでは手がまわらないため人に貸していましたので、夫が農業を始めるにあたって、その畑を返していただきました。

また、私の友人のお父さんでぶどうを生産している方に親身にご指導をいただくこともできました。

実家、地元のつながりって有難いですね。



### ● 須坂で生活して良かったこと、苦労したこと

須坂は地元なので、何か特別なものがあるでもなくこれがあたりまえであって、なんの魅力も感じてはいませんでした。

しかしいろいろなところへ転勤し暮らしてみた経験から改めて見直してみると、ここは自然も町もなんでも近くにあって、便利で住みやすいところかもしれないと思います。

それと、あえて特徴として挙げるならば、近所づきあい・人付き合いが濃厚です。町の行事が多いうえに、参加しないとものすごく心配されるんです。

また、子供の数でいえば都会の小学校の方が圧倒的に多いのですが、須坂の小学校に転入



してからの方が、仲良しのお友だちが増えました。

1学年1クラスしかないからこそ長い時間を一緒に過ごすので、学友ひとりひとりとの絆が深くなるのかもしれませんが。

### ●移住・新規就農希望者へメッセージ

正直、農業収入で食べていけるのかとか、そもそも経験なく始めて商品となるような作物がちゃんどつくれるのかなど、考えれば考えるほどいろいろと心配しました。

でも、始めてみれば意外と食べていけるし、むしろ季節を感じながら人間らしい生活を送ることができる、ゆとりある暮らしだと感じています。



里世子さんへのインタビューの間、隣でぶどうの荷造り作業をしていたご主人の尚文さんから

「50歳になったら農業始めるって予約しておいたよ」「常々相談していたよ」と物言いが入ると、「聞いてなーい！」と笑いながら応戦する里世子さん。

しかし、結婚当初からご主人の気持ちを知っていたこと、今の暮らしに満足をしていること、尚文さんが見据え準備を進めている将来について一番理解しているであろうことも、ちゃんと語っていらっしやいました。

「会社員でいれば安定した仕事・収入を得られたらうけれど、農業をしている夫はとても楽しそう。したいことを楽しそうにしているのは羨ましく思います。」

第一声の「反対」とは裏腹に思いやり溢れる温かな本音が、笑顔と共に尚文さんに向けられていました。

須坂市地域おこし協力隊 田島和恵

## No55 峰の原高原ペンションガーデンストーリーの山下大輔さん / 先輩移住者に聞く Vol.8 「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。

今回は須崎市峰の原高原地区のペンションのひとつ、ペンションガーデンストーリーのオーナーである山下大輔さんにお話をお伺いしました。

◆奥さん、息子さん、犬

2002年1月に東京都から移住



### ●ペンションオーナーになったきっかけ

両親が峰の原高原でペンションを開業し、私は7歳の頃から峰の原高原に住んでいました。

大学を卒業した後、10年間東京の会社に勤めていましたが、峰の原高原の穏やかな環境とは違って、東京でのサラリーマン生活は自分の時間もほとんどなく休みさえ取れないほど忙しい日々でした。

自宅はワンルームマンションで騒音の問題などがあり、街中は人が多くて騒がしかったりして、峰の原高原育ちの自分は10年間の東京勤務に疲れてしまいました。

そんな時、両親が関西に戻りたいということで私がペンションを引き継ぎ、たまたま結婚のタイミングとも重なり奥さんと一緒に峰の原高原に二代目オーナーとして戻ってきました。

### ●峰の原高原で生活して良かったこと、苦労したこと

ここで生活して良かったことは、東京の生活の時と比べて仕事の面でも住環境の面でも圧倒的にストレスが少ないということです。

ペンションでの生活は東京のワンルームマンションよりも広々としています。

建物もそうですし、庭もあります。庭へ一歩出れば山があります。その様な中での生活でするので空間の圧迫感というのは全くありません。

また、仕事の面でもペンションはお店と違ってお客さんが泊まりに来る日がわかります。

いつ来るかわからないお客さんを待つという精神的な負担は少ないです。

東京の頃に比べ自分の時間が格段に増えたということが大きいですね。

逆に苦労していることはやはり経営です。峰の原高原を知らない人が多い中でどのようにお客さんを集めるかが悩みどころです。

ただ、私のペンションはお庭好きの方々に注目されるようになり、近年はネット環境が整ったことで遠くの人でも検索でわかるようになったので昔ほど苦労は少なくなりました。



### ●須坂市・地域おこし協力隊への提案

峰の原高原のことを勉強していると思うことは、観光協会の情報発信についてもっと関わってほしいということです。峰の原高原の風景やイベントのことについてもっと発信すればいいなと思います。最近では自然志向の人が増えていることもあり、まめに峰の原高原について発信してファンを増やすことが大切だと思うのです。おすすめです。

### ●移住を希望する方へ

自然が好き、もしくはスポーツが好きな人にぜひ来てほしいです。

住む場所として峰の原高原は最高の場所です。

冬は厳しいので、その寒さと雪かきさえ我慢すれば後は水も空気もおいしいですし、のびのび暮らすことができます。

また、菅平や須坂市内で知り合いができれば、秋になるとリンゴやらぶどうやらレタスやらのねだしがいっぱいもらえます。

普通なら一個や二個なのですが段ボールひと箱もらえることがあります。DIYやクラフトが好きな人にとって、材料はすぐそこにあるのでおすすめです。



ペンションガーデンストーリー

須坂市峰の原高原721

<http://www.janis.or.jp/users/v.yama/>

TEL0268-74-2728

須坂市地域おこし協力隊 齊藤祐哉

◆秋元倫子さん

本人、夫、長男（高校1年生）千葉県木更津市から移住

ご主人の啓さんは、2016年5月に単身で須坂市に移住し里親研修を始める。倫子さんと長男は、長男の中学卒業を待って高校入学のタイミングで2017年春に移住。

「移住して農業を始めたことで、夫婦一緒に過ごせる時間をやっと持つことが出来た」  
今回お話しを伺ったのは、ご主人が単身で須坂に移住をされてからおよそ1年後となる今年の春に“時間差移住”をされた秋元倫子さんです。

冒頭に紹介した倫子さんのことばや、時間差移住の背景には、それぞれのやりたいことや役割を尊重しあいながら、理想の暮らしや生き方を追求し続ける家族の姿がありました。



●夫が農業を目指すまで

夫はもともものづくりが好きだったようで、会社に勤めるかたわら、「ものづくり」の仕事に就こうとしたことがありました。

しかしその時は、私には生活環境などの面でどうしても受け入れ難い点があり、諦めてもらいました。実はそのことがささくれのようにずっと心に残っていました。

だから夫からぶどう農家になるという新たな望みを聞いたときに、今回はなんとしても叶えて欲しい、応援しようと思いました。



●須坂への移住を決めるまで

移住・就農へ向けて、まず、二人で不安なことを箇条書きにして挙げてみました。全て望む通りとはいかない点もありましたが、優先順位をつけ、不安材料はひとつずつクリアにしていきました。

私は夫に「絶対成功して」とは言いませんでした。うまくいかないことがあっても次の手段を考えればいいことですから。

むしろ、やりたいことをやらない方が後悔してしまうのは以前の経験のとおりです。

幸い息子もこの移住には賛成で、私たちの背中を最後に押してくれたのは、彼の「早くしないと僕が先に就農しちゃうよ」という嬉しい言葉でした。



●須坂へ移住するまで

移住し農業を目指すことを決めると、まず夫が1年前に単独で先に移住し、ベテラン農家さんのもとで農業研修に入りました。

中学を卒業するまでは生まれ育った木更津でお友達と過ごしたいという息子の希望を尊重し、母子2人で千葉に残り中学生生活最後の1年を過ごしつつ、長野県の高校受験の情報収集や準備をしました。

いろいろ、中学校の先生にはご苦労をかけることもありましたが、おかげさまで息子は、今では元気に希望の高校へ通っています。

●須坂で生活してみて感じたこと

須坂はスーパーやコンビニも多く、県立の立派な病院もあり、また県庁所在地の長野市とも隣接しているので、とても便利で暮らしやすいと思います。

「田舎」というより、「都会と田舎の間」といった感じです。

移住を決める前にいくつかの地域を見て回りましたが、須坂は他の地域とは全く違う印象を受けました。

例えば町じゅういたるところ、道端や空地さえも草刈りなど管理の手が行き届きとてもきれいなのです。

他とは異なる須坂の独特な雰囲気は、須坂の人びとの真面目さや意識の高さ、歴史に育まれた地域全体の文化度の高さに因るものではないかと思います。



●やっと夫婦で一緒に過ごせる時間を持つことが出来た

以前は、ご主人の啓さんは長い間、休日も仕事から離れられず、せっかく家族なのに共有できる時間をほとんどとれないという毎日で、お二人とも割り切れない気持ちを抱き続けていました。

須坂に移住してから一緒に農作業に取り組むようになると「やっと夫婦で一緒に過ごせる時間を持つことが出来た」と感じたそうです。

それは、1日のうちに長い時間を一緒に過ごすという意味もあるでしょうが、むしろ同じ仕事で同じ目線で一緒に社会に係わっているという意味もあるのかもしれない。

「移住は夫の夢の実現を応援するものだったけれど、ふとした瞬間に目に入る美しいアルプスの山並みに感動し、夫に対して“ここ（須坂）へ連れて（移住して）きてくれてありがとう”という感謝の気持ちでいっぱいになる」と、語る倫子さんの表情はとても輝いていました。



大学時代に知り合ったというご夫婦は、子育てがひと段落した今、新たな目標を見つけ、それをふたりで共有し育みながら、恵み豊かな新天地で充実した時間を過ごしているでしょう。

須坂市地域おこし協力隊 田島和恵

## No57 「移住支援信州須坂モデル」で移住しました / <移住者インタビュー> 東京都から須坂市に移住した久米さんご夫婦と受け入れ企業の声

---

2017年9月に須坂市に引っ越して来て2ヶ月の東京出身の久米達也さん（45歳）と奥様の恵さん（45歳）のご夫婦は、須坂市の「移住支援信州須坂モデル」で移住されました。この「移住支援信州須坂モデル」は仕事と住まいをパッケージングしてご紹介し移住へと繋げるものです。

久米さんご夫婦に、移住に至った経緯やご主人の新しい仕事についてお話しをお聞きしました。また、久米さんを採用した博善社の竹村総務部長と久米さんの直属上司の小田切事業推進室参事にも移住者受け入れ企業の立場からお話をお聞きしました。



<久米さん移住決定までの経過>

- ・2017年1月下旬 長野地域の移住セミナーで須坂市を知り、興味をもって調べ始める
- ・5月27日（土）東京で開催した須坂市移住個別相談会に参加
- ・6月3日（土）移住体験ツアーに参加し博善社の見学、面談・社宅を見学
- ・7月1日（土）博善社で面接試験、採用決定
- ・7月～9月 勤めていた旅行会社の仕事を整理、自宅マンションを売却、自動車普通免許を取得
- ・9月下旬 須坂市に引っ越し
- ・10月2日（月）博善社で勤務開始

## ◆久米さんご夫婦のインタビュー

### ●当たり前だと思っていた東京での片道2時間通勤

「大学卒業後、全国展開する旅行会社に就職して20年以上経過していました。都内4店舗の営業所長を経験しましたが、片道2時間かけて通勤していた店舗もありました。なんとか終電に乗れても夜中1時に帰宅し翌朝5時起きの日生活だったり、終電に間に合わなければ会社に泊まる日もありました。都会での仕事はこれが当たり前だと思っていたので、大変さを感じながらもそんな生活を続けていました」

### ●移住の目的と長野県須坂市を移住地にした理由

「旅行会社での仕事は、接客や海外旅行商品の提案などお客様と対応したり営業所内をまとめるマネジメントをしていました。さらに今まで以上に大きな役割を任せられ「さあ、これから」という時だった昨年5月のこと、病気で倒れ生死をさまよいました。入院生活を終え8月には仕事の内容を変えて職場復帰し、状況を見ながら再び元の仕事に戻りました。しかし、この病気がきっかけとなり「本当にこのままの生活でいいのだろうか？」と思い始めました。結論は「東京で働き続ける必要性がない」という決断に至り、再び与えられた命を大切に人生をリセットしようとして今年1月から本格的に移住を考えるようになりました。元々、私たち夫婦は山が好きで登山もよく行っていたので長野県をいろいろ調べていました。須坂市は県庁所在地の長野市に隣接しているのと買い物環境や医療施設が揃っていて便利そうな場所だったので、住むなら須坂市、仕事は長野市が多いだろうと思っていました。東京の銀座NAGANOでの須坂市個別移住相談会に参加したところ博善社の紹介を受けました。しかも社宅付きで。これまではどの市町村でも「仕事はハローワークの求人から選んでください」と言われていたので、まさか仕事まで紹介してもらえと思わなかったです。さっそく移住体験ツアーに申し込みました。移住は第一に仕事、住まいはその次の課題だと思います」

### ●博善社の仕事を決めた理由

「今まで自分は旅行会社の仕事しか行っていなかったため他の業種ができるか不安な面もありました。しかし、紹介された博善社は葬儀会社で、お客様と関わり創り上げる点が旅行会社に共通する部分だったので「これまでの経験を生かせるかもしれない」と直感しました。移住体験ツアーでは、見学と面談のほか社宅も見ることができたことで移住後のイメージがリアルに広がりました。ただ、夜勤があることで以前に病気を患った自分には不安があり、会社に対して率直に希望を伝えさせていただいたところ、担当部署や働き方を考慮し採用していただきました」



## 6月の移住体験ツアー風景



### ●移住するまでに準備したこと

「これまで働いていた旅行会社の仕事の整理や引き継ぎで7月末まで東京で働き、それから他県での合宿免許で車の免許を取得しました。東京では車が必要ない生活だったので免許を持っていませんでしたが、移住後は必要になると承知していたので問題はなかったです。就業後に須坂市内で軽自動車を購入しました。自宅マンションの売却も準備期間中に済んだのですべて計画通りに進められました。採用してくれた博善社の方からは「きちんと仕事の引き継ぎを完了させてから来てほしい」という有り難い言葉もいただいていたので助かりました。仕事を持っていたら即移住というのは不可能だと思います。理解をしてくださった博善社には本当に感謝しています」

### ●須坂市で暮らしてみても

「まず今は初めての冬が心配ですが、順応していくしかないと思っています。今は車があ

るので市内の買い物はもちろん市外に移動するのも簡単ですし、長野市の本社に出勤するにも30分くらいで便利です。東京に住んでいた時は新幹線に乗らないと行けなかった自然のある場所へ今はすぐ行けます、それもたくさんあります。お金をかけずに遊びに行けます。来年の夏以降は登山も休みの度に行く計画をしています」

奥様の目線からは「スーパーは以前住んでいた所より数が多いですし、内容も変わらないので困らないです。うれしいのは野菜が安くてたくさん売っていることです。これにはとても満足しています。須坂市は東京と違って、ほどほどの人口で穏やかに暮らせる居心地の良い場所です。電車の時間は調べてから乗るようにすることを覚えました。東京で乗り慣れていた自転車が須坂市では走りづらいことがわかり、いかに一人一台の車社会かということを実感しています」と答えてくれました。

続けて奥様から現在移住を検討している方々へのメッセージとして「私たち夫婦は何よりも健やかに暮らすことが一番の希望でした。人生で何を大切にしたいのか、その価値観を確認できれば先を見据えた移住ができると思います。家族で話し合うことが大事ですね」と、今後の人生をよりよいものにしようとお主人と決意した移住だったことを話してくれました。

最後にご主人が「須坂市で今後ずっと暮らしていくのだから焦らずに気長に慣れていこうと二人で話しています。今の生活は病気が導いてくれた結果でもあり、博善社への就職をはじめ須坂市で暮らすこともご縁あっての移住だと思っています」と話してくれました。

#### ●博善社での仕事と今後の目標

「今は事業推進室という部署で葬儀後の法事やアフターフォローをしていて、お客様を訪問するなど上司に同行しながら仕事を覚えています。早く一人で動けるようになりたいと焦る気持ちもありますが、上司は「焦るな」と声を掛けてくれるのでとても心強いです。長野県の葬儀は東京と異なる部分が多々あり、地域のしきたりなど知ることが多く奥深い仕事だと感じています。東京の職場の人数に比べると規模は小さいですが、与えられた仕事が明確にあるのでやりがいがあります。早く自分なりの色を付けられるようになりたいですし、採用して下さった博善社に恩返しができるよう務めていきたいです」

### 博善社の竹村総務部長と久米さんの直属上司の小田切事業推進室参事のインタビュー

#### ●都会からの移住者を受け入れる

「もともとIターンの採用もすすめていたので移住者の採用は特に問題ありませんでした。これまでお世話になった前の会社の引継ぎなどを、きちんと済ませてから来てもらいたいと思っていました。我が社も法事などのアフターフォローを本格的に進める事業推進室を立ち上げるころだったので即戦力になる久米さんの受け入れは本当に良いタイミングでした」

#### ●会社のレベルアップのために

「我が社ではこれまで20代限定の採用を進めてきましたが、久米さんのように20年以上会社で実務を積んできた方は仕事のノウハウを直ぐ生かせるのが強みであり、会社のレベルアップにも繋がると考えています。久米さんは優秀な人材としての採用であったことはもちろんですが、お人柄もプラス要因でした。以前病気を患ったこともあったので心配もありましたが我が社には必要な人材でしたので働き方を考えながら採用を決めました。都会からの移住者でも適任の方がいれば今後ぜひ受け入れたいと思っています」

#### ●将来は会社の軸となる人材に

「久米さんの採用は我が社においても事業推進室の立ち上げとともにタイミングが良かった

たですし、これは本当にご縁だと思っています。奥様にも、移住して博善社に勤めて良かったと思ってもらえるような働きをしてほしいと願っています」

久米さんの直属の上司にあたる小田切推進事業室参事は「偶然ですが、私も久米さんと同じように長野市の旅行会社で営業を20年やっていました。同じく40代で博善社の仕事に就きました。久米さんも旅行会社でお客様を対応されてきたので早く職場や業務にも溶け込めるといいますし、できると信じています。将来は会社の軸となって皆を引っ張ってほしいです」とエールを送りました。



左から竹村総務部長、久米さん、小田切事業推進室参事



博善ホールセレモニー須高会館

移住者の大半は、いざ移住を決めても、現在の仕事の整理や生活の切り替え準備のためにある程度の期間が必要になります。その期間を考慮してくれる企業の存在は移住者にとって本当に有り難いことです。企業にとっても良い人材を採用できることは理想ですし、移住希望者にとっても「移住」に理解を示してくれる会社があるのは何よりも心強いです。

「移住者の受け入れ＝心を受け入れる」だと私は思います。全国には様々な地域があると思いますが、理解を持って受け入れる「人情」の部分が、この須坂市には強くあるように感じます。また、そう願いながら会社訪問をする日々です。

今回取材した久米さん曰く「移住は、将来を見据えて計画をしっかりと立てれば順当に進められると思う」ということでした。色々な思いを抱きながらも計画をもって進めたからこそその移住だと思っています。移住には希望者本人による「目的と決断」が必要です。私たち信州須坂移住支援チームは、あくまでも仕事や環境について充実した情報を提供することに徹し、そこに最後の決断のひと押しの部分を支援しています。最後は移住希望者の意志決定次第です。

移住後も引き続き私たち移住支援チームの役目が新たに始まっています。須坂市に移住して良かったと実感してもらえるよう支援をしていきたいと思っています。

移住をお考えの皆さん、まずは須坂市の移住相談会に参加してみませんか？

2017年11月取材

(須坂市移住・定住アドバイザー 豊田貴子)

## No58 ペンション四季のオーナー富田浩二さん / 先輩移住者に聞くVol. 9「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。

今回は須坂市峰の原高原地区のペンションのひとつ、ペンション四季のオーナーである富田浩二さんにお話をお伺いしました。

◆奥さんと1977年8月に埼玉県から移住



### ●ペンションオーナーになったきっかけ

東京の高校で教師をしていました。しかし、大変忙しく、また、生まれてこの方、人が多いところでしか住んだことがなかったので、人が少なくのんびりしたところで住んでみたかったということがありました。

まず、峰の原高原で保健休養地開発がされていたのでその土地を見に来ました。

その時に北アルプスが綺麗に見えて、その印象が大変深く、ここで生活したいと思いました。

そして、峰の原高原で生活するにはどのような仕事があるのかを調べていると、たまたまその時代はペンションという宿泊形態が誕生してすぐだったので、それなら素人でもすぐにはじめられるのではないかと思い、ペンション業をはじめました。

### ●須坂・峰の原高原で生活して良かったこと、苦労したこと

基本的には今の生活に満足しています。

まだ、仕事をバリバリしていた時には冬のシーズンはスキーのお客様ということで忙しかったですが、ある程度歳を取るにつれてスキーのお客様を迎えるというよりも冬を我慢して過ごせば、あとは素晴らしい季節が待っているという心境に変わりました。

逆に苦労したことは、経済的にも、もちろん大変でしたし、慣れない旅館業でしたので台所の中心だった料理を作る妻の方が私よりもよっぽど苦労したのではないかと思います。

幸いなことに40年間ここで暮らしていけるくらいお客様が来て下さったので経済的に苦労

したということは少なかったと思います。  
今は高齢になり冬の寒さと雪の多さに苦労しています。



### ●須坂市・地域おこし協力隊への提案

高齢者という立場になって思うことは、高齢者がどうやってここで暮らしていけるかということです。

やはり高齢者がここで暮らしていくには行政の援助がないと暮らしてはいけません。ここ峰の原高原には公共交通機関がありません。

ですので、高齢者が無理をして車の運転をして暮らしていかなければなりません。

これが結構厳しいのです。

ですから一日一便でも、一週間に一便でもいいのでここで暮らしていくために必要な公共交通機関が欲しいです。

また地域おこし協力隊には空きペンションの活用をどうにかしてもらいたいです。

観光的に見ても空き家というのはマイナスになってしまいます。

### ●移住を希望する方へ

移住希望者にはたくさんペンションに泊まってオーナーさんの話を聞いて欲しいです。

それがここで暮らしていくパワーになります。

私も開業する前にお話を聞いたりしてペンションの経営だったり、峰の原高原のことだったり聞いてアドバイスをいただきました。

もし、ペンションを経営したいということであれば、偉大な先輩たちがたくさん峰の原高原にはいますので、是非泊まって話を聞くのがいいと思います。



ペンション四季

<http://home.t08.itscom.net/horn/siki.html>

(須坂市地域おこし協力隊 齊藤祐哉)

## No59 「先輩方を見習っていけば大丈夫！とイメージが出来ました」 ／ 須坂市で頑張る新規就農者を支える家族Vol.9

---

### ◆岩城由佳利さん

本人、夫、長男（3歳）、次男（1歳）の4人家族  
2014年4月に神奈川県川崎市から移住

先輩移住者として移住希望者にメッセージはありますか？と質問したところ、一度、意外な顔をされたので、これから移住を考えているひとたちから見れば貴女はもはや移住の先輩ですよ、と申し上げたところ、それまでの笑顔に戻って「特別なことは何も…、子育てしかしていないのですよ」という控えめな言葉。

今回お話しを伺った岩城由佳利さんは、ご結婚をされた直後にご主人が就農へと動き出すや、またたく間に移住が決まり、さらにはその間に最初のお子さんを授かって身重の身体でお引越し。

まるでジェットコースターのような流れで現在の暮らしに至るまでの状況やご自身の心境などをお聞きしました。



### ●夫が農業を目指すまで

最初のきっかけがなんだったのかは覚えていないのですが、漠然と老後は田舎暮らしや農業もいいな、くらいには思っていました。

夫は医療機器メーカーで働いていたのですが、自分で作ったものを売ってみたいと考えるようになり農業に関心を深めていったようです。

そんな暮らしのなかで、歯車が回り出したのは、私たちが結婚してまもなくのこと。

夫が『新農民になろう』という新規就農者へのインタビューをまとめた本に出会ったときからです。

その本で紹介されていた長野県内の脱サラ農家さんの記事に感銘を受け、実際に会いに行き、話を聞き、「新農業人フェア」にも足を運ぶようになりました。

そのように過ごすうちに、長野県でぶどう農家になるということに目標を定めたようです。

#### ● どうして須坂を選んだのか

須坂以外にも県内のぶどう産地へ足を運びました。その中から須坂に決めた理由は、市の担当の方が熱心に対応してくださったことが大きかったと思います。

また、既にIターン移住して農業里親研修を受けて就農した先輩がいるということで、この地域は移住者を受け入れ農業後継者として育成していく流れが出来ていると思いましたが、そんな先輩方を見習っていけば大丈夫だろう！とイメージすることが出来ました。



#### ● 須坂で生活してみても良かったこと

車が必需品ですが、それはとっってもラクなことだと思います。

なぜかという、都会と比べ、駐車スペースに困ることもないし、道も車が多すぎることもないし運転しやすいです。

臥竜公園など緑の多い広い公園や親しみやすい動物園など、子供連れで楽しめる場所がたくさんあります。

私はペーパードライバーでしたが、須坂ではすぐに車を運転することに慣れることが出来ました。

また、家から出たところは畑の中の農道なのですが、ここからは山がきれいに見えて癒されます。

この景色を見ると、移住してもうすぐ4年になるというのに、今でもまるで旅行をしているときのように心がわくわくするんです。

#### ● インタビューを終えて

由佳利さんに移住希望者へのメッセージをお聞きしたところ、冒頭のように「子育てしかしていない」という答えが返ってきました。

須坂に移住するときは第一子を身ごもっていて、移住直後に出産のため一時的に東京の実家で過ごし、須坂に戻ってから初めての育児に奮闘しているうちに第二子を授かり出産の前後をまた実家で過ごす、ということをお繰り返していたということで、今ようやく一息つけているところ、ということだそうです。

確かに由佳利さんからは移住に対する気負いのようなものは全く感じられませんでした。それは、結婚・出産・育児という女性としてのライフステージの変化の中にたまたま「移住」とご主人が選んだ転職「就農」が含まれていただけのことなのかもしれません。

伴侶と共に家庭を築き人生を歩いていく上で、どんな仕事をし、どこで暮らすことになったとしても、一番大切なものは変わらない、という潔さのようなものが感じられました。

葡萄屋iwaki

Email : budouya.iwaki@gmail.com

Tel : 026-405-6631

〒382-0000 長野県須坂市大字八町706-10



◎Facebook・Instagramにて随時情報発信中！『葡萄屋iwaki』で検索してくださいね♪  
※岩城さんは、平成29年度長野県園芸特産振興展第50回うまいくだものコンクールぶどうの部（ナガノパープル）で、最高賞である農林水産大臣賞を受賞しました。

須坂市地域おこし協力隊 田島和恵

**ひんのベ汁やこねつけ、ニラせんべいを作りました / 「郷土料理を作ろう！」移住者交流会を開きました**

---



来たる新年も頑張ろうということで、今年須坂市に移住された皆さんと移住者交流会を開きました。

せっかく須坂市に移住したのだから郷土料理をみんなで作って食べよう！という企画で、「ニラせんべい」や「ひんのべ汁」、残りご飯で作る「こねつけ」、定番の「おやき」作りに挑戦しました。

ちょうどクリスマスの時季だったので、須坂のりんごを煮た手作りジャムを挟んでデコレーションしたケーキも作りました。

「カンパ〜イ！」みんなで協力して作った料理を美味しくいただきました。





移住者の皆さんは須坂市に暮らして初めての冬を迎えます。  
このところ最低気温は軒並みマイナス5度前後でしたが、皆さん思ったよりそんな低い感じはしないとのこと。少しホッとしました。  
寒くなるだろうとわかっていると人間の体は順応できるようです。何より健康であることが一番ですね。  
庭先にある木にふと目をやると、ふくらんだ枝先の芽も寒さにじっと耐えて頑張っています。  
澄んだ夜空を見上げれば無数の星が迫ってくるかのように綺麗です。  
田舎だからこそ味わえる身近な自然から季節を感じ、この冬を楽しく過ごしてほしいと願う年の瀬です。



(移住・定住アドバイザー 豊田貴子)

### ★須坂・暮らしサポート情報「須坂市の伝統ある郷土料理」

須坂市で受け継がれる郷土料理をご紹介します。

詳しくはこちらをご覧ください

<https://www.city.suzaka.nagano.jp/kurasuzaka/info.php?id=201>